

末黒野

すぐろの

7月号 (通巻815号)



惜
春

小川玉泉

ほ
ど
ほ
ど
に
残
さ
れ
花
圃
の
花
薺

あ
る
な
し
の
風
を
見
せ
を
り
雪
柳

半
歳
の
曾
孫
よ
く
笑
ひ
う
ら
ら
け
し

囀
や
独
り
昼
餉
の
米
を
研
ぐ

出航の汽笛の三度花の昼
鳥居まで花のトンネルくぐりけり
胸に手にまとひ堤の花吹雪
雨後の日に葉のてらてらと山桜
放課後の静かさへ散り八重桜
図書室の曇りなき窓櫺萌ゆ
呼び込みの島の乙女や暮の春
蒸したての饅頭苞に春惜しむ

花さんぽ

松本三千夫

花吹雪昼の屋台は幕降ろし
川ならば筏となるを花の塵
花散らす雨の睫を打つことも
花の雨厨にひかる鍋薬缶
落花浴ぶ五尺三寸紛れなく
釈迦生まれ西行死せるさくらかな
ポケットの中にポケット山笑ふ
禅寺へ突き当たる路地藪椿
丈低く幅三間の藤匂ふ
時に粗き城址の風や藤の花
島霞み菊の御紋の三笠艦
晩春の風の捲れりグラビア誌

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

普羅碑

田中臥石

百円の朝採り野菜四月馬鹿
就職の孫来ぬ苞の草の餅
胸元に抱へて旅の芹匂ふ
入学の子や匂ひたつ母若し
菜の花の電車乗りけり一輛車
酒を買ふ桜日和の城下町
朝掘りの春のたけのこ筑前煮
普羅の碑や自在に風の落椿
智恵子碑へ径の連翹海ひびく
遠望の海田やかや山桜

春深し

松田泰子

菜の花の吹かれて島の動きけり
道問ふや山の桜のことなども
ときどきは子の戻りくる花筵
ややありて動き始むる花筏
友誰もすこしづつ病む桜冷え
目かくしの椿よく咲きよく落つる
おのづから椿の重さ咲き揺るる
太陽へ裏返されて春の土
念入りに茶をいれ桜日和かな
長靴の水を出しをる潮干狩



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花

菅野 蒔子

終了と機械の告ぐる四月馬鹿
雪消えし畑やこぞれる菜の蕾
田起しに遠会釈してペダル踏む
青年の仰ぐ旧家の朝桜
消防車救急車過ぐ花の昼
紅枝垂桜や主三代目
家族みな同じ母校や花の昼

花の雲

堺 昌子

遠汽笛近き汽笛や燕来る
岸壁の波打ち返す彼岸潮
若布干す手だれの老いの二人かな
矢狭間や近く遠くに花の雲
城内に山駕籠二つ花の冷え
天守よりひかりあまねし花の雲
猿山の綱渡る猿春の昼



風光る 中野久雄

くつきりと晴るる朝や芽木光る
町川の水陰散らし桜東風
溪音を恋ふるがごとし飛花落花
さざ波のさ走る水田風光る
昨夜雨の晴れて鶯来て鳴けり
止めどなく桜葉降る城址かな
振り返る柵田の里や藤の花

引き鴨 西川みほ

春泥や馬柵すれすれに競走馬
島裏の春陰払ふ鳶の笛
風尖り日差しのみなる春立ちぬ
飛び立ちし鷗に湾の風光る
鳩を追ふ児のすり足や青き踏む
引き鴨の群れの阿吽の呼吸かな
菜の花に抱かるごと乳母車

蘆の角 森清堯

波の穂を蹴つて高みへ春鷗
泊船の亭午の汽笛鳥雲に
白れんの百花もみあふ空の蒼
たたみくる子のなぜなぜや蘆の角
池の端のことに明るし雪柳
夕ざくら影絵のごとき塔を負ひ
地の起伏あまさず見せて芝桜

山 桜 吉田きみえ

花すみれつなぎてぬくき幼女の手
農を継ぐ子等なき里や山桜
山吹や古刹に残る釣瓶井戸
夕日濃し松の根方の紅つつじ
耕しの老爺や仰ぐ空模様
連れ立ちて三溪園の花めぐり
岩はしる水音峽の青柳

青炎集

小川玉泉選



横浜 庵原敏典

横浜 辻井ミナミ

家苞の春子に添へぬ檜の葉

白木蓮の散りて錆朱を深めをり

夕ざくら風の運べる遠汽笛

海苔浜を遠目に舵を渡し船

海境の潮目くつきり初燕

若布負ひ磯着の婆の帰り舟

横浜 岩上行雄

横浜 神谷さうび

朗読の賢治の童話杏咲く

引売りの誓むる眼の張り桜鯛

天帝へ奉るかに紫木蓮

踊ること歩く幼や芝青む

逸れ球の消えたるあたり竹の秋

惜しみなく千灯ともし土佐水木

潮の目の著き海峡桜東風

初燕珈琲香るピルの間

門閉ざす教会の塔風光る

瓦斯灯の大正ロマン夕桜

城跡の空堀明し鼓草

初花や湾一望のレストラン

横浜 神谷さうび

三塔を臨む棧橋朝霞

蘆の芽や流れゆるやかなるところ

芹の水光を返しつつ過ぎぬ

飛び石を渡るや蛸蚪の国騒ぐ

鶯の声のいざなふ島路

桜しべ踏み石階のやはらかき

横浜 熊切 修

うぐひすに不意を衝かれて躓けり

通学児の列を乱しぬ桜東風

歳月は肩に背に桜東風

春塵や媼の集ひ尽くるなく

春夕焼橋脚洗ふささら波

危なげに風を操り番蝶

横浜 河合 とき

鉄鎖錆ぶ外人墓地や花董

霾や港狭むる倉庫群

横浜とよぶ緋桜の丘に立つ

這ひ這ひの嬰のはみ出つ花筵

花冷えや丹念に溶く吉野葛

蕾みな夕日の色や桃の花

横浜 大橋 弘子

次々と両手に受くる落花かな

ゆく水の落花を乗せてゆるやかに

蓮華田の眩しきほどの野道行く

坂許りの湯の町有馬柳絮飛ぶ

どつぷりと有馬の赤湯月朧

桜餅食べ終へたる葉住き香り

横浜 岡本ヨシエ

鶯や島の静寂の丸木椅子

玄界灘の波おだやかや鳥雲に

島めぐり海面に映ゆる花万朶

皇居公開乾通りの花の雲

振り仰ぐ枝垂桜に人の波

八重山吹道灌の名を残す濠

横浜 波多野孝枝

菜の花や周防訛の一両車

桜東風に逆立つ髪や柩待つ

御詠歌に花の散り初め法然忌

茅屋に春の波音里泊り

老犬の終日憩ふ梅の宿

せせらぎに列をなしをり柳鮠

横浜 木下 晃

初花と言ふも五輪や朝日影

庭中を巡りて飽かず紋黄蝶

外つ国の人や花見に人力車

花びらを浮かべてゆるり目黒川

満開の桜色濃き夕茜

引く潮や足裏くすぐり桜貝

耕 土 集

松本三千夫選

紅椿咲ききつてより花昏し

日蓮の像に吹き上ぐ花吹雪

盛塩のとけゆく夕べ花の風

春愁や砂に埋まる捨てバイク

石棺に五円光るや春愁ひ

横須賀 齊藤 眉山

山桜カメラ自在の老婦人

気高くもかたくりの花うつむきぬ

寺の庭枝垂桜の三百年

花見酒大正琴の春の海

花種を蒔く手たひらに土撫でて

赤塚 篤子



との曇水辺の道の初桜

花の中流るる川のささ濁り

本門寺の塔も包みぬ花盛り

花筵縁者田居の墓園かな

目交ひを鳶の滑空春うらら

横浜 和泉 道草

梅の咲く丘や彼方に空母見え

足湯にて桜眺むる旅さなか

町の其処此処やいつしか花盛り

菜の花の前カメラ出す老夫婦

寺社巡り梅の里にて昼休み

行川 秀雄

子雀よここは野鳥の料理屋ぞ

老犬の媪頼りや春の道

水温み遠くなりけり富士の峰

里で買ひ里山で食ふよもぎ餅

雲海の中にあつること桜山

布施由岐子

林泉の陶の河童や花明り

はくれんの並木日差のたつぷりと

揺れ合つて雨の雫や藤の花

ブロックの塀の隙間やすみれ草

時折は花びら届く昼の宴

荒井 貞子